

Nara Women's University

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学日本アジア言語文化学会 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): 空海, 書簡, 書儀, 正倉院文書, 靈異記 キーワード (En): 作成者: 奥村,和美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5414

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

奥村和美

『日本国現報善悪靈異記』（以下『靈異記』と記す）の文章は正格の漢文とは異なり、いわゆる変体漢文の一種に分類される。所々に経典からの引用があり、押韻した贅を添えることもあるが、総体的には漢訳仏典の文章ともまた異なる、和習を含んだ独特の文章である。しかも、記紀のように一書としての精錬された様式を備えるとは言い難く、語彙・語法ともに不統一で雑然とした印象が強いが、それでもなお、『靈異記』の文章の中に、ごく一部だが、明らかに異質な性格の文章の混在しているさまを見ることができる。本稿は、その異質な性格の文章の指摘と、異質さの由って来たところの検討、及びそのような文章の様式をとる表現上の意図等について考察を行うものである。

一 上巻四縁

『靈異記』上巻四縁「聖徳太子示_二異表_一縁」は、三部分から

なる。第一部は、聖徳太子の称号に関わる説話、第二部は、標題となった聖徳太子と乞句人との隠身の聖説話で、第三部は、第二部の類話の、円勢と願覚との隠身の聖説話である。いま問題とするのは、第三部末尾近くの次の一節である。本文を新編全集によって掲げる。

比頃不謁恋思无間。起居不安也。

百濟出身の円勢法師が住む葛木の高宮寺の北坊に、願覚という法師が居住していた。円勢の弟子の優婆塞の観察するところ、謎めいた行動の多い願覚であったが、それこそが願覚が聖であることの証左であり、そのことを円勢は見抜いていた。ある日、にわかに関覚が亡くなり、遺骸は円勢の指示で優婆塞によって火葬された。しかし、後日、願覚が近江にいるという噂を聞いて優婆塞は見に行く。そのとき、死んだはずの願覚が優婆塞に逢って言ったことが前掲部分である。

諸本には次のように見える。いま句毎に分けて示す。

興福寺本 比頃不諸、恋思无間、起居不安也(注1)

国会本・群書類従本 比頃不調、恋思無間、起居安不也

前田家本 比不調、恋思无間、起居不也

前本は、上巻を欠くが、下巻の巻末に幾つかの話が拾遺的に収録されており、そこに上巻第四縁の第三部が見える。冒頭二句は「比頃不調、恋思无間」が正しい本文であろう。後述するように「比」と「頃」は同義で、『靈異記』には二語が結合した「比頃」の例は多い。問題は「起居」のあとである。前本の「不也」では意味を成さないので、興本の「不安也」か国・類本の「安不也」のいずれかであろう。前者「不安也」の場合、「起居」は願覚の暮らしぶりを指し、「起居不安也」で、わたし願覚は日々逢いたくて落ち着かなかったという意になる。後者「安不也」の場合、「起居」は相手の暮らしぶりを指し、「起居安不也」で、優婆塞に対しての、日々のお暮らしにお変わりございませんかという問いかけになる。「く不也」で、「くかどうか」という選択疑問を表すことは、『靈異記』では他に、「唯聴不也」(中巻三四縁)、「是語宜受不也」(下巻三八縁)など会話文中に見える。文脈としてはどちらも可能で、前者では、願覚が

離れていた間の辛さを訴えたと解することができ、後者では、離れていた間の相手の消息をうかがったと解することができる。しかし、「比頃」「恋思」「起居」の語彙と、存問の型にそぐうことからすると、後者が正しい本文ではないだろうか。例えば、敦煌写本の『吉凶書儀』(P.342b)にこのような書簡文例が見える(「内は双行注」)。

A 与外祖父母書、外伯叔祖附之

名「女云某氏次第女」言、違離「外伯叔祖云違離」稍久、

思恋恒積、不奉近誨、無慰下情。孟春猶寒、不審

翁婆「并平闕」尊体起居何如…… (外族古書儀)

B 与夫之祖父母父母書

大新婦「以夫之第数称次第」言、違離經年「經時、經

朔、累月、稍久、未久、已久」、思恋無寧、奉某月日誨、

伏慰惶悚。孟春猶寒、不審尊体起居何如…… (婦人古書儀)

『吉凶書儀』は、唐・杜有晋が開元年間(七一三〜七四一)に編纂したとされる書儀である。Aは外祖父母或いは外伯叔祖あての書簡の模範文例、Bは婦人が夫の祖父母にあてて出す書簡の模範文例である。「違離稍久」「違離經年」——逢わずにい

る期間が長くなり、「思恋恒積」「思恋無寧」——慕情のつこの頃、「不審尊体起居何如」——いかがお過ごししかと気がかりです、と述べる典型的な御機嫌伺いの文例である。僧侶間のやりとりでも、語句に多少の違いはあるが、基本的な文章の骨格は同様である。

C 与和尚闍梨書

名稽首和南「道士除和南字」言、違侍稍久、思恋無比、奉某月日誨、伏慰下情。孟春猶寒、不審和尚闍梨尊体何如……
(僧尼道士吉書儀)

また、このような書儀に則った書簡の実例として、三蔵法師玄奘がインドの智光法師にあてた書簡の一節を挙げることができ
きる。

D 大唐国苾芻玄奘、謹修書中印度摩揭陀国三蔵智光法師座前。自一辞違、俄十余載。境域遐遠、音徽莫聞。思恋之情、每増延結。彼苾芻法長、至蒙問、并承起居康豫、豁然自朗、若覩尊顏。踊躍之懷、筆墨難述。節候漸暖、不審信後何如……

(興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』巻七 永徽五年二月)
智光・恵天の両法師から書簡と様々な贈り物が届けられたこと

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

への返信である。書簡の冒頭は、別れてより十年以上経過し、音信は絶え「思恋」の情は増すばかり、お手紙をいただき「起居」の安らかなることを承ってまことに嬉しいが、その後いかがお過ごしですか、と続く。書儀の型を踏まえつつ状況に即した自在な文面である。Dも含めABCに共通する「思恋」は、書簡では相手に対する強い思慕の情を表し、異性間に限らず親族間や僧侶間でも用いられる書簡語である。^(注5)王猷之の「餘杭帖」「珍重帖」「思恋帖」にも見える。『靈異記』の例は語順が逆だが、『考声切韻』逸文に「恋思也」とあり「恋思」と「思恋」とは同意。また「起居」は、日々の動静、暮らしぶりの意。「不審尊体起居何如」は、『世説新語』(言語篇)にも見えるように御機嫌伺いの常套句である。『靈異記』では、「不審何如」という聞き方ではなく、「不也」「不也」という選択式疑問である。これは「不」に同じ。「不也」「不」の選択式疑問は、どちらも仏典に例が見える。

王問婦言、此別人者、实是爾夫不、答言、实是。王時語言、識我不也。

(『雜宝藏經』巻二「昔王子兄弟二人被驅出国縁」)
会話文中に見えるように、「不」「不也」「不也」は口頭語的な口

吻をもつ。「く不」という存問のしかたは書簡に多い。

比可不（注8） （晉・王眠「十八日帖」「淳化閣帖」一）

比復可不 （晉・王循「秋月帖」「淳化閣帖」三）

足下小大佳不（晉・王献之「集聚帖」「淳化閣帖」十）

「可不」「佳不」とも、およろしいですかどうですか、という親しみをこめた御機嫌伺いである。『日本書紀』齊明天皇五年七月の遣唐使の復命では、唐天子に拝謁したときの会話を伝える。その中で、唐天子が遣唐使達に「日本国天皇、平安以不」「執事卿等、好在以不」と尋ねた後、「国内平不」と尋ねたとある。「平安以不」「平不」という存問は、「安不也」に同じ。

なお、「比頃」は、「比」「比者」「比来」、「頃」「頃者」などと同じで、このごろ、ちかごろの意。これらも指摘されているように俗語文や書簡文に例が多い。（注9）前掲法帖例にも「比」と見えた。ただし、「比頃」は用例が非常に乏しく、

時、長生太子、即自停住、使王懈怠、比頃、軍衆未至

（增壹阿含經「高幡品」）

とある程度である。

願覚のことは、久しぶりに再会した人に対するものとして
は、

自王宮出、門有三人、著之黄衣、值優婆夷而歡喜
曰、唯暫所覲。比頃不隣故、吾恋思。何偶今逢。……
（中卷十九縁）

に似る。これは、ある優婆夷が閻羅王の王宮から還される場面で、黄衣を着た三人、実はかつて優婆夷が書写した経巻が、優婆夷に偶然出会って言ったことばである。このごろ見なかつたので、わたしは恋しく思っていました、と。しかし、願覚のことばは「起居安不也」まで含めて考えれば、書儀に則った改まった挨拶のことばとして記されていると見るべきであろう。「謁」も、敬意をこめて逢うことを表す語で、書簡や書儀に頻出する。死んだはずの願覚が生きていた、そのことは優婆夷が逢って一目見ればわかるはずである。加えて、挨拶のことばが書儀に則った折り目正しいものであることで、教養ある法師であること、すなわち願覚法師であることが確信される。願覚の、しばらく遠いところへ行っただけのような平然とした挨拶は、逆に、願覚にとって死がその程度の此事であることを意味し、生死の境を軽々と越える願覚の聖らしさを強調することにもなるだろう。

なお、先掲の、玄奘が智光法師にあてて記した書簡には、おなじくインド摩訶菩提寺の恵天法師あての書簡をとまなう。そ

の書簡の冒頭部分は、智光法師あて書簡とほぼ同じ御機嫌うかがいではあるが、表現を細かく異にする。

大唐国苾芻玄奘、謹致書摩訶菩提寺三藏惠天法師足下。

乖別稍久、企仰唯深。音寄不_レ通、莫_レ慰_二傾渴_一。彼苾芻法長、至辱_レ書、敬承_二休豫_一、用増_二欣悦_一。又領_二細白氈兩端_一、讚頌一_レ來。來意既厚、寡德、愧_二以無_レ當_一、悚息悚息。節氣漸和、不_レ知信後体何如也。

(興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』巻七 永徽五年二月)

智光に対しては「坐前」、惠天に対しては「足下」を用いるように、それぞれに対する敬意の示し方に明確な区別がある。

智光に「思恋之情、毎増_二延結_一」と記すのに対して、慧天には「莫_レ慰_二傾渴_一」、また、智光に「蒙_レ問、并承_二起居康豫_一」と記すのに対して、惠天には「辱_レ書、敬承_二休豫_一」というように、智光には総じて丁寧な高い敬意をこめた書き方をしていた。

『三藏法師伝』によれば、智光は五印度の学者がみな宗と仰ぐ人物であり、一方の惠天は、玄奘が西域にあったとき切磋琢磨した仲間であった。つまり、書簡語としては、「恋思」「起居」などは相当尊貴な人に対して用いる語彙であると言える。ここで願覚がそのような区別を知って用いているとしたら、願覚の

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

ことばは、目の前の優婆塞に対する挨拶というよりは、優婆塞の師である円勢への挨拶と考えられよう。優婆塞を介して、円勢に御機嫌伺いを言っているわけである。そのように解することによって、はじめて、この説話において円勢と願覚との間に相互理解のあったことが知られ、聖のみが聖を知るという第一部の説話テーマといっそう深いところで合致することが理解できらる。

このように願覚のことばが書儀・書簡的表現を利用して綴られていることは、中国において書儀が、折々の行事における口頭の挨拶の範例ともされていたことを反映するものと考えられる。日本においても僧侶どうしの会話(注)であれば、そのような唐風の挨拶が日常的に行われた可能性も考えられる。もう一方の円勢師は、中国の高僧静謐とみられる藉法師(新大系脚注)の弟子で、百済国の人であり、優婆塞はその弟子であった。もともと『靈異記』において、願覚のことばに、漢文の書儀・書簡に基づいたところの、どのような日本語が想定されているのかわらかではない。しかし、つぎに述べるように、それは多分に訓読文的なものではなかっただろうか。

二 下卷二十縁

『靈異記』において、書儀・書簡の表現が利用されたと思われる箇所をもう一つ挙げよう。下卷三十縁の次の部分、中の観規という僧の発話箇所がそれである（本文は新編全集による）。

即從_レ坐起、引_レ率明規並親屬、長跪礼_ニ於多利丸_一言、「観規少_レ分、尽_レ命不_レ畢_ニ観音像_一、而忽率罷。今幸逢_ニ嘉時_一、盍申_レ所思。伏願蒙_ニ尊芳慈_一、欲_レ畢_ニ聖像_一、寸心之願、僅当_レ所望、故後生大福、被_ニ於観規_一、現報功德、蒙_ニ於尊主_一、不_レ勝_ニ至誠_一、更參還來、奉_ニ無礼状_一、悚慄謹白」。

爰多利磨及以明規等、悲哭涕淚而答曰、「請_{（前本・來本}」既請_）語状、我必奉_レ畢」。沙門聞之、起拜歡喜。

紀伊国名草郡の観規という僧が、十一面観音菩薩の木像を自ら彫造しようとしたが、完成することなく亡くなった。しかし、観規は二日後に蘇生し、弟子で息子の明規に命じて智識の一人である武蔵村主多利丸を招き、食事を饗するなどして丁寧にもてなした。右は、その後、観規が、唯一の心残りであった観音像の完成を多利丸に託し、多利丸と観規の弟子達がそれを承諾するという場面である。多利丸は仏師とも記されているが、お

そらく檀家の中での有力者なのであろう。対話のうち、観規のことばについて、新大系脚注にこのような指摘がある。

この観規の発言全体は書簡文の形式をそなえている、といえよう。書簡の結びのことばとして大伴池主の書簡（万葉集・十八・四〇七三）に「奉_レ状不備」、空海の書簡（性靈集・十）に「奉_レ状不宣」とみえ、この類例は唐宋の書簡にもみえるのだが、本説話の「奉_ニ無_レ礼状_一」も、書状を呈する意であらう。

詳しい論証は省略されているが、観規のことばが書簡の形式をもつことの指摘と、それに基づく末尾の「奉_ニ無_レ礼状_一」の解釈の変更とを記す。またこれに伴い、新大系では、多利丸の返答の「語状」の「状」も書状の意で解し、「既請」の本文をとって「既_すに語れる状_{ふみ}を請_うく」と訓読されている。「書状を呈する意」という新大系脚注の解釈に従えば、観規から多利丸にあてた「状_{ふみ}」があったことになる。が、地の文では言及されないその書簡と、観規の口頭のことばが書簡の形式をとることとの関係が必ずしも明らかではない。

そこで、まずは、観規のことばが書簡の形式を備えるのか否か検証しておきたい。末尾の文言に着目するならば、「悚慄謹

「白」からとりあげるのがよいだろう。

「謹白」は、「謹啓」や「謹言」と同様、書簡の書き止めにしばしば用いられる。

超死罪白……謹白

(晉・劉超「保任帖」『淳化閣帖』三)

釈道高白……謹白

(宋・釈道高「答李交州書」『弘明集』卷十^{〔註13〕})

『日本書紀』に載る、推古天皇の隋煬帝への返書にも、

東天皇敬白「西皇帝」……謹白、不具

(『日本書紀』推古天皇十六年九月辛巳)

とある。正倉院文書中の書状の書き止め文言には、「謹啓」の方が数が多いが、

謹白……以謹白

(天平勝宝三年八月十六日「僧嚴智状」

『大日古』3:524 続修45:6)

のように「謹白」もいくつか見え、「謹啓」との使い分けは特に認められない。『萬葉集』巻五の吉田宜の書簡に見えるのは、「宜啓……宜謹啓、不次」のように「謹啓」の方である。

「慄慄」は二語ともおそれかしくまる意。「慄愧」「慄懼」

「戦慄」などヴァリエーションが様々にある。

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

釈道高白……追増「慄愧」。流汗霰霑。謹白

(宋・釈道高「重答李交州書」『弘明集』卷十一)

は「慄愧」の例。「流汗霰霑」はさらに恐縮の意を込め、後の「謹白」へと続いて書簡の書き止めの表現をなす。

正倉院文書には、

大浦誠恐誠惶謹啓……伏亦悚灼、頓首頓首、謹白

(天平宝字二年九月四日「大津大浦啓」

『大日古』4:300 続修46:4)

更請……慄息々々、謹啓

(天平勝宝五年八月十二日「僧智愾論疏奉送啓」

『大日古』13:21 続々修16:7)

と「悚灼」「慄息」の例が見える。前者の書き出しに見える「誠恐」「誠惶」の「恐」や「惶」もほぼ同様の使い方をする。「恐惶、謹啓」「誠惶、誠恐、謹言」などは、『文選』や『本朝文粹』等所収の上表文や奏状に多く見られる文書の末尾表現である。そのことからもうかがえるように、書き止めに「慄慄」と「謹白」を重ねるのは、かなり丁寧な表現で、^{〔註14〕}中国の「書」のジャンルの中ではむしろ「表」に近い。

沙門玄奘言……謹奉表以聞、輕触天威、伏増「慄汗」。

謹言

〔請〕太宗文皇帝作「經序并題經」表 知恩院藏本

『大唐三藏玄奘法師表啓』、『寺沙門玄奘上表記』にも所収

沙門玄奘言……輒敢聞奏、輕触軋蔽、伏增「慄慄」、謹言

〔請〕取梵本「表」 『寺沙門玄奘上表記』

沙門玄奘言……奉「表」、陳謝以聞、輕犯「威蔽」、伏深「戰慄」、謹言

〔謝〕許書大慈恩寺碑文「表」 『寺沙門玄奘上表記』

いずれも玄奘の皇帝に対する上表文である。「慄汗」「慄慄」(慄)「戰慄」(慄)で恐懼の念を表し、「謹言」で締めくくる。

日本の平安初期の表にも次のように見える

沙門空海言……輕塵、震辰、伏深「悚越」。沙門空海誠惶誠恐謹言

〔統遍照發揮性靈集〕九

94 「於」紀伊国伊都郡高野峯被請乞入定処「表」

沙弥如実言……不「耐」荒悚之至。謹重奉「表」、陳乞以聞。

沙弥某、誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言

〔本朝文粹〕卷五 大江匡衡

136 「為」入道前太政大臣「出家後辞」封戸并准三宮「第二表」

したがって、「慄慄謹白」で終わる観規のことばは書簡の形式を備えると言つてよく、中でも「表」に通じるような過剰に丁寧な表現をとると言える。ただし、右の諸例に見えるように、「謹白」「謹言」「謹啓」の書き止めをもつ文章は書き出しを、名＋「白／言／啓」などとして書き止めと呼応させることが多い。一方、観規のことばは冒頭、一人称を「我」ではなく「観規」と名で言うが、「白」にあたるものが無い。あえて探せば、直前の地の文に「長跪礼於多利丸言」とある「言」か、後文の「盖申所思」の「申」がそれにあたるかもしれない。「表」の形式を意識するならば、冒頭もそれにあわせて然るべきだが、やや崩れているところは、全体としての整齊を欠くと言わざるを得ない。他には、「寸心」、「尊」、「尊主」、「蒙」、「伏願」など書簡特有の語或いは書簡に常用される表現が見える。つまり、観規のことばは、書簡的な語を用い、新大系脚注の指摘するようには、書簡の形式にならうと言えるが、冒頭が型どおりではないことからすると、厳密には、書簡を応用した形式で書かれていると言つた方が正確だろう。

さて、「奉無礼状」の「状」は、『靈異記』では、さま・かたちの意と書状の意とのどちらでも用いられ、どちらの意であ

るか文脈によって判断するしかない。下巻三十五縁のように、同じ話の中でも、「状」が、様子の意で用いられる例「黄泉之事状」と解文の意で用いられる例「得解状」との両方が見えることもある。「奉_レ状」は、新大系脚注が指摘するように、書簡で用件を述べたあと、末尾の文言として、いまこのように手紙をさしあげます、と言ってしまうもので、中国日本にかかわらず書儀・書簡に散見する。新大系が指摘する空海の例をあげる。

泰範言……謹因_二某甲_一奉_レ状、不_レ宣。弟子泰範和南

〔『統遍照発揮性霊集』十「為_二泰範答_一叡山澄和尚_一啓書_一〕

空海が弟子泰範に代わって記した書状で、最澄に返書を出すことを「奉_レ状」と言う。正倉院文書では、書状を呈すること
を「奉_二不_レ次_一」、「捧_二不_レ次_一状」、「捧_二醜_一状」と言うこともあり、「奉_二不_レ次_一」は『萬葉集』巻十七に載る大伴池主の書簡（天平十九年三月五日）にも見える。

なお、「無_レ礼状」の例は、正倉院文書に、

謹頓首白……具_二無_レ礼状_一、謹頓首白

（天平宝字七年七月二十五日「下道主状」

『大日』5454 続修479）

『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用

さらに、時代は下るが、石川県加茂遺跡出土の文書様木簡にも、

謹啓……无_レ礼状具注以解 〔『木簡研究』18:139〕

と見える。もっとも、「具」「具注」とあるからこれらの「状」は「事状」に同じである。

新大系以外の諸注釈は、「奉_二無_レ礼状_一」を、文脈から意識的に「ぶしつけなお願いをいたしました」（『新潮集成』）というように解するが、直訳的には「いまこのように無_レ礼な書状をさしあげます」の意であろう。「無_レ礼な書状」の本身は、もちろん観規が個人ではじめた仏像造立の完成の依頼だから、「ぶしつけなお願ひ」の訳で必ずしも間違いとは言えない。しかし、ここでおさえおかねばならないことは、書かれたとおりに解すれば、観規が多利丸に直接に対面して、書状或いは書状に似た文書を読み上げているとしか考えられないということである。おそらく、多利丸を招いて相應の饗応をした後、勸請の文書（注19）を弟子を含めた知識衆の見守る中、改めて当人の前でそれを読み上げて正式な依頼を行う、そういう儀式的な場がもたれたと推測される。

観規が自らの意思を表に近い様式をもつ書状に認めたとする

ことには、観規の意思、つまり十二面観音像を完成させたいという願いの崇高さを示すねらいがあったと思われる。檀家の中の有力者であるとしても地方の一介の仏師にすぎない多利丸に對する書簡の書き方としては、日本の書簡が中国のそれに比較して大げさになりがちであるということを考慮に入れるとしても、いかにも大仰で、相手の身分や地位に相応するものではない。しかし、そのような特別にあらたまった書き方をとり、特別な席をしつらえてなされた勸請であると記すことによって、蘇生してまでも伝えなかった観規の高い志とその事業の偉大さを表そうとするのだろう。それは、観規のことばが、彼の死後、弟子や遺族達のあいだに効力をもつ「遺言」となるのにふさわしい演出であり、「贊」にいう観規の「聖心」を文章を通して表現するものとも考えられる。

なお、多利丸等の返答部分「請（前本・来本「既請」）語状、我必奉_レ畢」について付言する。先述のように新大系はこの「状」も書状の意とし、「請」を請求する意ではなく受け取る意に解して、「既_{（注20）}に語れる状_{（注20）}を請_{（注20）}く、我れ必ず畢_{（注20）}へ奉_{（注20）}らむ」と訓読する。一方、大系、新編全集は「請」を多利丸等話者の願望を表すと解して、「請_{（注20）}はくは、語る状_{（注20）}は、我必ず畢_{（注20）}へ奉_{（注20）}らむ」

と訓読する。しかし、『靈異記』で「請」は、他者への希求を表す例ばかりで、受納する意の例や自己の願望を表す例は見えない。また、多利丸等への願いの内容が仏師の勸請であることから考えても、この「請」は、観規の多利丸等への希求を指すもので、新潮集成的ように「請_{（注20）}ひ語りたまひし状は、われ必ず畢_{（注20）}へ奉_{（注20）}らむ」と訓読するのがよいと思われる。この返答のことばは、特に書儀・書簡的ではなく、観規のことばとは大きな落差がある。

観規のことばは、発話部分でありながら、いちじるしく文章語的文書的であるところに特徴があり、それは、書儀・書簡の語の利用とその形式を踏襲することに由来していた。観規によって読み上げられたことばは、おそらく、そのような漢文或いは変体漢文で書かれた文書を訓読したものであったと推測して誤りないだろう。観規は、説話冒頭で「有智得業、並統衆才」と紹介された。「得業」は、新編全集によれば、「僧の学問上の階級の名で、南部の三会…「中略」…に招かれ、論題について義を講ずるの業を経験したもの」という。經典に通じて該博な知識を有し、講義を行うことができた僧侶の発することばとし

て、それはいかにもふさわしい。書儀・書簡の表現を利用した文章が僧侶の発話部分に見られることは、そのように僧侶達が日常的に、或いは改まった場においてはなおさら、それらの訓読に基づくことばを話していたことを証するものと考えられる。その訓読文が、どのような日本語なのか、例えば字音語を多く含むのかどうかといった具体的ことは、いまは不明としか言いようがない。

以上、『靈異記』において、書儀・書簡の様式や語彙を利用した表現を具体的に指摘し、各話における表現意図について考察した。特に、それが僧侶の発話部分であることから、少なくとも上代末から平安時代初期にかけて、僧侶の口頭語にそれらの訓読文が用いられていたであろうことを指摘した。

注

- (1) 興福寺本訓釈には、「比頃 二台己乃己呂」「藹 津加飛乃 津良敷之天 (国本・諷 ツカヘワツラス)」と見える。
- (2) 新大系は、「安不也」にさらに一字を補い、「安也不也」と校訂するが、以下述べるように特にその必要はないだろう。
- (3) 『古凶書儀』(P342)は、趙和平氏『敦煌写本書儀研究』(新

文豊出版公司、一九九三年四月)による。

- (4) 築島裕氏『興福寺本 大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』(東京大学出版会、一九六五年三月)による。以下同じ。

- (5) 書簡語の「恋」については、芳賀紀雄氏『萬葉集における中国文学の受容』『願文・書儀の受容』海東と西域の問題―(稿書房、二〇〇三年十月、初出一九九九年)を参照した。

- (6) 『考声切韻』は、上田正氏『切韻逸文の研究』(汲古書院、一九八四年二月)による。

- (7) 『雑宝藏経』は、『大正新脩大藏経』巻四、No.203による。

- (8) 『淳化閣帖』は、森野繁夫氏・佐藤利之氏編著『淳化閣帖 法帖篇 訳注篇』(白帝社、一九八八年六月)による。

- (9) 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学 中』第五篇第四章(一)「文字の口語性」(稿書房、一九六四年三月)。

- (10) 『増壹阿含経』は、『大正新脩大藏経』巻一、No.125による。
- (11) 中前正志氏「火葬と火解と夢解―『日本靈異記』の一問題」(花園大学研究紀要)二十一号、一九九〇年三月)は、火による一種の尸解と見る。

- (12) 丸山裕美子氏『日本古代国家・社会における書儀の受容に関する基礎的研究』(平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究C))研究成果報告書、二〇〇六年三月)

- (13) 『弘明集』は、『大正新脩大藏經』卷五十二、No.2102による。以下同じ。
- (14) 正倉院文書の中の書状の待遇表現が書簡文として大きな傾向をもつことは、前掲注(12)丸山氏論文に指摘がある。
- (15) 知恩院蔵本『大唐三藏玄奘法師表啓』は、貴重古典籍刊行会第二期第六回の影印(一九六〇年六月)による。
- (16) 『寺沙門玄奘上表記』は、小泉索太郎氏蔵本の複製(柯蔭精舎、一九〇〇年)による。以下同じ。
- (17) 『統遍照発揮性靈集』は、『弘法大師空海全集』第六卷(筑摩書房、一九八四年十一月)による。以下同じ。
- (18) 『本朝文粹』は、岩波新大系による。以下同じ。
- (19) 僧侶への屈請に書簡体の文書を用いることは、『続日本紀』天平勝宝八歳十二月己酉の条の、東大寺等に梵網經講師を請う「詞」にも見える。
- (20) 「受」の意で用いられる「請」については、奥村悦三氏『古代日本語をよむ』第一章「2 仮名文書の成立以前 続——正倉院仮名文書・乙種をめぐって——」(和泉書院、二〇一七年五月、初出一九七八年)に詳しい。

【附記】

本稿は、平成三十一年度奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所

一般共同研究「空海の漢文書簡にみられる書儀及び正倉院文書表現の受容実態の解明——平安前期の漢文書簡との比較を通して——」による成果の一部である。

——おくむら かずみ・本学教授